

# 研 究 報 告

## 「総力戦」へのアプローチ 1890 - 1918 年 第一次世界大戦とその遺産

ブライアン・ボンド  
ロンドン大学キングス・カレッジ

「第一次世界大戦が我々の世紀につきまとい、そしていまだに我々を悩ませている」としたモドリス・エクスタインスは、この大戦をまさに「我々の世紀を代表する事件」と呼んだ<sup>1</sup>。ポール・ケネディは同様の調子で、この戦争に引き裂かれた世紀がその終焉に近づいている今、「第一次大戦が今世紀を覆った影は、以前にも増してより長く、より暗く、そしてより威圧的になっているようだ」と述べている<sup>2</sup>。イギリスでは最近、第一次大戦が第二次世界大戦以上に人々の関心を集め論争的となっているが、逆に客観的な歴史として受け入れられることは後者に比べて少ないという状況にある。

本稿では、表題で総力戦への「アプローチ」という言葉を特に留意して用いているが、その理由は、正確にいつ戦争というものが完全な形で「総力的」になったかについて歴史家たちがいまだに議論を続けているからである。しかしながら、我々が自信を持って断言できることは、19世紀半ば頃から戦争がより激しくより破壊的になっていったようだという点である。これは主に、兵器、兵站、そして輸送手段について遅まきながら産業革命の影響が現れたことと、ほとんどのヨーロッパの軍隊で徴兵制が採用されたことによる。1866年と1870-71年にプロシアが戦った短期決戦は、こうした一般的な傾向に対して人々を誤らせる事例となった。これらの戦争における勝利の設計者であった大モルトケは、19世紀末における一般の政治的、軍事的状況の中で、短期戦が繰り返し得るとは楽観視していなかった。むしろ、彼は「内閣戦争」（一部の政策決定者のみ関与する）が、激情的で抑制の効かない「国民」戦争に置き換わるであろうと予感していた。プロシア軍参謀総長としての長い勤務の最後に、彼は不吉にも未来の七年戦争や三十年戦争すら予言していたのである。

新しい時代に向けた平時の戦争計画作成過程で、参謀たちは大規模な軍隊、近代化された火砲と小火器、そして複雑な要塞施設の出現という条件下でいかに短期決戦で勝利するかという

---

<sup>1</sup> Modris Eksteins, "Memory and the Great War" in Hew Strachan (ed.), *The Oxford Illustrated History of the First World War* (Oxford & New York: Oxford University Press, 1998), pp. 305, 317.

<sup>2</sup> Paul Kennedy, "In the Shadow of the Great War," *The New York Review of Books* (August 12, 1999), pp. 36-39.

難問と格闘した。1883年までにはドイツのゴルツ将軍は、完全な動員がなされた際はフランス陸軍とドイツ陸軍はまさに西部戦線で機動するための地積を失うだろうと算定した。長期持久戦の生起は不可避のように思われた<sup>3</sup>。

作戦計画の立案という軍事専門職の制約を離れて、ポーランドの鉄道家であり、銀行家であったイヴァン・ブロッホは、ヨーロッパでの戦争はその様相と結果の両方において破滅的なものになるだろうと、当時の想像を絶することを考え始めていた。彼は8年間にわたる集中的な研究を経て、1890年代の後半に『未来の戦争』(*The War of the Future*)という6巻本を出版した。ブロッホは、軍縮、平和そして自由貿易を求める道義論者であった。その彼は、近年の火力の発達が防御側に有利な状況を与え、戦争が長期にわたって膠着化するであろうことを適確に捉えていた。巨大化した軍隊は、深刻な補給問題を抱え、機動のための地積を失う。「全員が次の戦争では塹壕に入るであろう」と彼は予言した。「兵士たちにとってスコップは小銃と同じく必要不可欠なものになるだろう...戦闘は何日間も続き、最終的に何らかの決着が得られるかは大いに疑問である<sup>4</sup>。」

今日、「銃後」と呼ばれる問題に関しては、ブロッホは現代戦における心理的ストレスや経済的困難に対する国民の忍耐力を疑問視していた。食糧生産のための労働力不足が生じるであろうし、輸送システムも破壊されるであろう。無政府主義者と社会主義者が秩序破壊を煽動し、革命の動きが進む中で、戦場における勝利よりも飢餓が最終的決定要素となるであろう。ブロッホはこうした諸条件が戦争を不可能にすると信じるほどに非現実主義的ではなかったが、戦争に訴えることが政治的、経済的そして社会的な自殺行為になるであろうとは信じていた。勝者の存在は怪しいのであった。

ブロッホは日露戦争で彼の考えがまさに試されることになる前の1902年にこの世を去った。第一次大戦の本質を極めて正確に指摘していた「名誉なき予言者」としてブロッホはしばしば引き合いに出されるが、実際には、彼は論客としての洞察力と共に欠点をも合わせ持っていた。彼の軍事的分析の問題点を指摘すれば、例えば、火力地帯は、大変危険ではあっても、柔軟な戦術と決断によって突破できないものではなかったのであり、それは1904年に日本の歩兵部隊が証明したのであった。より根本的な問題としては、技術革新、特に自動車と航空機の出現が、戦場における機動をすぐに回復させることになった。ブロッホはまた、誤った指揮と劣悪な装備のロシア軍すら1917年になるまで戦わせ続けた愛国心、戦友愛、そして軍隊の規律というような諸要素についても考慮に入れてはいなかった。

驚くべきことに、ブロッホは経済や政治の問題についてもあまり洞察的あるいは予言的では

---

<sup>3</sup> Brain Bond, *The Pursuit of Victory* (Oxford: Oxford University Press, 1998), p. 83.

<sup>4</sup> *Ibid.*, pp. 88 -91.

なかった。例えば、彼は交戦国の政府が人的パワー、海運、鉄道、石炭、そして長期持久戦遂行に必要不可欠なすべてのものを統制するために、民間部門に無情と思われる程度まで介入してくるであろうことを予想できなかった。皮肉にも彼は、ロシアの食糧自給力と産業の相対的後進性が長期戦においては自国の力の維持に大いに役立つであろうと信じていた。

プロッホは自ら仕えた国、まさに第一次大戦中に最も早くにそして最も徹底的な革命に苦しんだロシアについての予言を誤ったとはいえ、長期持久戦における軍事的損失および民間人の困難、苦しみが敗戦国で革命の動きを絶頂化させるであろうと予測した点ではおおむね正しかった。フランス、イギリス、イタリアを含む戦勝国すべてにおいても、戦争の最終段階や終戦直後に、革命に似たストライキ、暴動を経験していた。

振り返ってみて、次の戦争が短期決戦となると確信していた 1914 年以前の軍指導者を批判することは容易である。しかしながら、最近の研究では、軍指導者たちはまさにプロッホが描いた恐怖のシナリオに気づいていたが、その解決策を見出すのが彼ら専門家の仕事であると考えていたとの説が有力である。軍指導者らは、戦線の膠着状態出現の可能性を予見していただけではなく、ヨーロッパ経済とそれに依存する政治秩序は長期持久の戦いの中では生き残れないだろうという一般市民と同様の不安を抱いていた。1890 年代にドイツ参謀本部長を務め 1906 年に退役したシュリーフェンが、その後書き記したように「数百万の軍隊の維持に 10 数億の経費がかかる時代には、持久戦略は不可能<sup>5</sup>」であった。いわゆる「シュリーフェン計画」も、西方において早期に決定的勝利を収めることを狙っていたので傲慢と言われ、長い間痛烈な批判にさらされてきたが、現在こうした見方には大幅な見直しが行われており、シュリーフェンは彼の前任者と同じくドイツが戦争の主導権を握り早期の勝利を収め得ることに關しては全く自信を持っていなかったとされている<sup>6</sup>。

このような 1914 年以前の将軍たちの苦悩や頼りなさについて思いを致してきたが、プロッホのリベラルで平和主義的な理想と戦争忌避の態度が、1914 年の戦争勃発に深い衝撃を受けた西ヨーロッパの支配層にさらに広く受け入れられていたことを強調しなければならない。ドイツやオーストリア=ハンガリー帝國的な「国家政策の一手段」としての戦争遂行は、多くのリベラリストや社会主義者から、国際的な人的・物的交流が高まり、経済の相互依存が深まることが既に明らかになっていた時代においては常軌を逸した行動と見られた。

さらに、ヨーロッパにおける平和的繁栄と協力を期待する楽観主義者にとっては、負傷兵士、捕虜、そして民間人の状態改善を目指したジュネーブ協約の広範な承認や、より近年には今で言う軍縮に向けた 1899 年と 1907 年のハーグ会議の開催という肯定的な証拠もそろっていた。

---

<sup>5</sup> *Ibid.*, p. 87.

<sup>6</sup> Terence Zuber, "The Schlieffen Plan Reconsidered," *War in History*, vol. 6, no. 3 (July 1999), pp. 262-305.

従って、1914年以前のヨーロッパ世界を平和と国際協力の牧歌的世界として理想化してしまうことは容易であるが、エドワード・グレイ卿のしばしば引用される告別の辞は、いまだに深い響きを持つ。1914年8月4日に外務省の窓から暗くなる外の景色を見て、彼はつぶやいた。「全ヨーロッパから灯りが消えた。我々は生きている間に再びこの灯りが点るのを見ることはないであろう。」何が起ころうとも、世界は決して元に戻ることができないのであった<sup>7</sup>。

ここで第一次大戦の詳細を述べる必要はない。軍事史家はいまだこの紛争について大きな関心を持ち、多くの側面（例えば、バルカン作戦、東部戦線、そしてイタリア戦域など）が見過されたままであることを知っているが、専門外の人々にとっては、この戦争は政治目的達成においては的外れ、軍隊指揮においては犯罪に近い無能、そして最終的な結果としては失敗あるいは無益と同義語なのである。イギリスの大衆や他の国々の映画ファンで流行となったこの戦争についてのステレオタイプと決まり文句は、1960年代の作品、後に賞賛された映画 *Oh What a Lovely War!*<sup>8</sup> に最も生き生きと表現されている。非常に有名な歴史家であるジョン・キーガンでさえこうした否定的または超批判的な見解を有しており、彼は最近この戦争を「遂行の方法が残酷で、結果が破壊的な恐ろしい戦争。ここに20世紀の病根のほとんどが由来している」と記している。さらに、伝統的な「ロバに指揮されたライオンの部隊 (a body of lions led by donkeys)」というイギリス陸軍に対する評価を、公文書館における地道な研究活動に基づいて覆した若い世代の研究者に対して、キーガンが軽蔑の目を向けていることが問題である。より一般的にも、彼は西部戦線の作戦における「学習曲線」という考え方を拒絶している。筆者の考えは「1918年にドイツ軍、および特に連合軍は、1914年にはなかったかなり近代的な方法で作戦指導を行っていた<sup>9</sup>」というキーガンに対する批判的見解を是認するものである。

しかしながら、20世紀の文明が総力戦あるいは野蛮な事態へと突入したというより広い観点から、一般大衆が第一次大戦に厳しい評価を下している理由は理解しやすい。限定的なヨーロッパ（実際は、バルカン）紛争であったところのものが、一挙に大陸全土に拡大し、1917年にはとうとうアメリカが参戦したことで「世界戦争」の名に値するものになった。大国を相手に戦場での決定的勝利は不可能になり、一方、ベルギーやルーマニアのような中小国でさえ領土の一角を死守することができた。

犠牲者、物理的破壊そして市民生活分断の規模は、最も悲観的な予言者の予想をはるかに越え、当初問題であった政治目的とそれらの犠牲との釣り合いは全く問題外となったようであっ

<sup>7</sup> グレイの発言は以下による。George Dangerfield, *The Strange Death of Liberal England* (New York: Capricorn Books, 1961), p. 424.

<sup>8</sup> Alex Danchev, "Bunking and Debunking" in Brian Bond (ed.), *The First World War and British Military History* (Oxford: Oxford University Press, 1991).

<sup>9</sup> John Keegan, "A Dreadful War" in *RUSI Journal* (June, 1999), pp. 99- 101 and G. D.

た。これは戦争が政治の統制を離れて勝手に拡大していくというクラウゼヴィッツが最も恐れた事態の現実化であった。

すべての戦場と「戦争区域」が、テレビがなかった時代の一般市民が想像できないような、苦しみと破壊の場であったことは当然のことであったが、1914年から1918年の西部戦線があらゆる尺度において最悪なものだったかどうかは疑わしい。例えば、食糧や水の補給、医療支援、そして後方での娯楽施設などについては、ガリポリやパレスチナやメソポタミアではほとんど文明と無縁であった。イソンゾ川や冬のカルパート山脈の生活も決してピクニックとはいかなかった。ロシアの兵士は西欧諸国では許容されなかったであろう欠乏生活に耐えた。それにもかかわらず、西ヨーロッパの人々とアメリカ人にとっては西部戦線が第一次大戦における最低最悪の「恐怖」の代名詞となった。我々の周りにはそれに関する古戦場、画像、回顧録、そして詩歌があふれている。「塹壕戦」とか「ソム川のような」というフレーズは不愉快な状況や無能なリーダー、そして無益を意味する言葉としてイギリスのメディアで日常的に唱えられた。軍事史家はその実態をあいまいにする決まり文句としてのこうした表現の使用を嘆くであろうが、いずれにせよ「総力戦」の意味について議論をする場合、歴史的事実を覆い隠す神話があることは注意しなければならない。

第一次大戦のもう1つの恐ろしい特徴は、兵士と一般市民の間の莫大な人命の損失であった。最近の権威ある算定数では842万7015名の兵士（アメリカを除く）と約500万人の一般市民が死亡したと見積もられている<sup>10</sup>。軍人の戦死者数としては控え目であると思われるが、いずれにしても1918年から1919年のスペイン風邪を原因とする死者数がトータルではるかに多くなる<sup>11</sup>。もちろん、こうした比較に特に意味があるわけではない。なぜならば戦闘での青年男子の高い比率の損失あるいは「犠牲」は、批評家に言わせれば避けられるべきであり、また大幅に減少できた人為的な悲劇だったからである。

フランス、ロシア、ドイツなどの大陸国はこうした大量殺戮を以前に経験していたし、また第二次大戦であらためて経験することになるのだが、イギリスにとっては派遣した人員数とその損失の規模は前代未聞のことであり、その後も決して繰り返されそうにもないのである。最近イギリスで風変わりな報道記事があり、それによるとイギリス全土で2、3の村が第一次大戦で兵士の損失を1人も出さなかったことで「最も幸運」であったと主張していた。しかし、大多数の都市や町村の戦争記念碑や教会には長々とした犠牲者のリストがあり、悲劇を物語っており、第二次大戦の短い犠牲者リストの3～4倍の長さである。こうした記念碑、そして深

---

Sheffield in *RUSI Journal* (February-March 1999), p. 91.

<sup>10</sup> Norman Davies, *Europe: A History* (Oxford & New York: Oxford University Press, 1996), pp. 1328-29.

<sup>11</sup> Pete Davies, *Catching Cold: 1918's Forgotten Tragedy* (London: Michael Joseph, 1999).

く心を動かされる戦没者墓地が、一般大衆の戦争理解にまさに影響するものなのであり、他方、修正主義の歴史家は自らの危険でこれらを無視しなければならないのである。

歴史家が今、戦時中議論が戦わされていた戦争指導に関する批判と、平和条約への失望および戦時中のレトリックや宣伝で約束したより平和的で繁栄的な世界建設の失敗からくる戦後の「反戦」的態度とを区別することはほとんど不可能となっている<sup>12</sup>。

かくして、1918年には軍事的勝者と敗者が確かに存在してはいたが、そして勝者は戦後初期の政治的混乱で苦しむところは確かに少なかったが、戦争の結果には例外と両義性が存在していた。いくつかの顕著な例を取り上げてみよう。ドイツのヨーロッパ支配の野心は阻止されたが、決定的に終止符が打たれたのではなかった。ロシアは無政府状態と内戦に続き屈辱的な敗北を喫し、革命によってソ連に変わったが、それでも世界強国としての潜在性は疑うべくもなかった。フランス、イギリス、そしてイタリアは、通常いずれも勝者と考えられているが、いくつかの面ではまるで敗者のように振る舞わなければならず、これら3国の損失は甚大であり、英仏は、いかなる犠牲の下にも次の「総力」戦を避けるべしと決心したのであった。そして最後にアメリカは、1918年の戦勝で果たした役割は限られたものではあったが、平和への移行に決定的役割を果たし、最強の経済的、財政的大国として出現したのであった。第一次大戦直後に、アメリカはヨーロッパでのバランス・オブ・パワーを維持するためのカードを持つ国として残された。しかし、それを行使することは拒否した。

第一次大戦の遺産について検討する際に陥りやすい危険は、20世紀の残りすべての歴史が書かれてしまうことである。それほど政治や文化芸術全般への影響が包括的で息の長いものなのである。例えば、ポール・ケネディは、1914年から1918年の戦争が「近代において他のいずれの戦争よりも歴史の道筋を変えた」と信じている。彼は、旧ヨーロッパ王朝体制の崩壊、「今世紀において人間性に多大の荒廃を招いた」共産主義体制の出現、そしてファシズムとそのドイツ版たる国家社会主義の成長について言及する。さらに「この身の毛もよだつ高価な戦争がヨーロッパ中心の世界秩序を破壊し、金融センターの重心をニューヨークに移し、東アジアにおける日本の拡張主義を誘引し、そして...西アフリカからインドネシアの反植民地運動を刺激した<sup>13</sup>」としている。

さてここで、このシンポジウムのテーマにそった軍事史家の「教訓」となるようないくつかのポイントを指摘して、この大きなトピックについての結論を簡潔にまとめる。

第1に、1914年から1918年までの間、主要交戦国が数年間にわたってその国民に莫大な犠牲を強いることを進んで行った異常さ、そしてその想像を超える困難に直面した際の国民の忍

<sup>12</sup> Brian Bond, "'Anti-War' Writers and their Critics" in Hugh Cecil and Peter H. Liddle, *Facing Armageddon* (London: Leo Cooper, 1996), pp. 817- 30.

<sup>13</sup> Kennedy, *op. cit.*

耐力は衝撃的である。先に述べたように、この決定的な人的要素はプロッホの擬似科学的分析からは全く抜け落ちていた。しかし一方で、批評家に言わせれば軍指導者は兵士たちの犠牲を当然のことと考えていたことになる。第2に、イギリスのようなより穏健な政府においてさえも、国家「総力」戦遂行のために1914年以前には考えられなかったような個人や団体の自由剥奪という過酷な手段を採るようになった。1916年はじめの一般徴兵制の導入はその顕著な例であった。また、敵のスパイに対する警戒の結果として行き過ぎとなるのであったがと、出版とその関連業の検閲が実施されたことは共に、新しい時代が到来したことを告げた。プロパガンダもかつてないほど、戦争を遂行する国家の活動の中で高く位置づけられ、敵を悪魔と同視させることについては短期的な成功を収めたが、同時にこれは第一次大戦後の世界に問題を残すことになった。故A・J・P・テイラーの言によると、多くの第一次大戦下の「憎むためのプロパガンダ」が最初は信じられてはいたが後で嘘であるか誇張であることが発覚したため、第二次大戦では極端な懐疑主義が生まれ、敵の残虐行為に関する似たようなうわさの信憑性はかなり疑われた。その結果、恐ろしい現実が過小評価されてしまった。

第3に、軍指導者は無能であった（「ロバに率いられたライオン」的概念）という認識が広く根付き、将軍たちに高い犠牲者発生率の直接責任があるとされた。この確信は全くの間違ひではないが、奇妙なことに世論においてこうした確信が強く支持されたのは、フランスやイギリスのような戦勝民主主義国においてであった。ただし、こうした英仏での批判は次のようなあまり取り上げられない疑問を提起した。もしフレンチやヘイグ、ジョッフルやフォッシュがそうした無能な指導者であったのなら、コンラッド、ファルケンハイン、そしてルーデンドルフたちはどのように評価できるのか。イギリスではこの軍事的無能の「神話」（誇張）が1918年以降陸軍に気の毒なイメージを与えたが、しかしまた、アレキサンダー、モントゴメリー、ブルック、そしてスリムのような、自らの専門を真剣に捉え、戦闘計画を説明する必要を理解し、結局は犠牲者の最小化に心を配るような新しい世代の指導者を生み出す一助となった。しかし、この点に関しては軍事史家の見解と、主に第一次大戦期のイギリスの将軍たちの風刺漫画を常に見てきた偏見を持った大衆世論の見解との間には大きな亀裂がまだ残されている。

戦間期はまた、ヒトラー、スターリン、そしてムッソリーニのような「文民軍国主義者」、あるいはチャーチルやルーズベルトといった民主的枠組みの中ではあったがその権威を軍首脳部に押し通した文民独裁者らの出現という、クレマンソーの言った「戦争は将軍たちに任せるにはあまりにも重要な事柄である」ことが具現された時でもあった。欧米では東條大将が軍人独裁者であったと信じられているが、第二次大戦時の日本は、上記のパターンのいずれにも当てはまらない例外である<sup>14</sup>。

---

<sup>14</sup> B.A. Shillony, *Politics and Culture in Wartime Japan* (Oxford: Clarendon Press, 1981).



第一次大戦は、中小の参戦国がときによって主要参戦国にくっついたりあるいは離れたりしたという同盟間の戦争という本質を持っていたため、戦略的にはより複雑に展開し、「勝利なき平和」に終わることは不可能であった。もちろん、こうしたことは決して新しい現象ではなかったが、民族と民族主義の大儀、秘密条約、そして誇張されたプロパガンダという諸要素が加わることで、紛争は長引き総力的になることはより確実となった。例えば、オーストリア＝ハンガリー帝国は 1916 年に個別の平和条約の交渉を試みたが、より強力な同盟国ドイツの抱込み策から逃れることはできなかった。また、第二次大戦時に枢軸国側よりは英米側によってより留意された同盟国間の政策と戦略の調整に関する重要な教訓も残された。

「すべての戦争を終わらせるための戦争」といった第一次大戦中に充満した大げさなレトリックと、数多くの領土的要求を満足させ得なかった平和条約は、以後新たな全面戦争の可能性を直視したがいなかった疲弊した戦勝国イギリス、フランスと、イタリア、ドイツ、そして日本という軍事的支配の野心を捨てなかった満足せざる主要大国との間に亀裂を生じさせることになった。

本稿の表題は特に注意を払って「総力戦へのアプローチ」としている。1918 年の生存者は彼らの戦った戦争が決して「総力的」ではなかったと聞かされると落胆するが、しかし世紀の終わりという我々の位置から客観的に見ると、1890 年から 1918 年という期間は軍事発展においては過渡的期間であり、悪霊に駆られたようなイデオロギーと結びついた科学の発展という恐ろしい可能性からはまだ相当距離を置いていた。第一次大戦、少なくとも西部戦線では、多少の残虐行為はあったが、軍人の名誉という伝統と国際条約の尊重からくるある種の相互儀礼がその行動の基底にあった。このことは戦傷者と捕虜の扱いに顕著に現れていた。

現在の視点から我々は、正当な戦略目標として敵国の一般市民を攻撃対象に据えたことを、第一次大戦の最も悲惨な遺産として指摘できる。もちろん一般市民は、しばしば不慮の犠牲者として、また、ときには攻城戦や海上封鎖で故意の攻撃目標となることで、いつも戦争で苦しんでいた。19 世紀の大砲の発達は、1870 年のパリにおけるように、既に都市を長射程砲撃に対して脆弱なものにしていたが、しかし 1914 年以前の段階では敵国の全成人人口が戦争にかかわっていたと主張することはできなかった。ところが、人的パワーの総動員と鋳工業、運輸業、そして農業における女性の広範な進出は、戦闘員と非戦闘員の境界をかなりあいまいなものにした。こうしてイギリスとドイツの海軍は敵の一般市民を苦しめることが確実となる戦略を採用するようになり、そして 1917 年ドイツの無制限潜水艦戦は明らかにイギリス政府が食料の極度の不足によって和を請わざるを得なくなるよう意図して行われたのであった。同様の無情さで、イギリス海軍はドイツにヴェルサイユ条約を受け入れさせるためにドイツへの海上封鎖を戦争終了後も数ヶ月間継続した。

しかし、第一次大戦で真に革命的発展を見ることになったのは、航空戦であった。飛行船や

航空機による都市に対する長距離爆撃は物質的にはほとんど被害を与えることはなく、一般市民の死者は、プロパガンダの材料にはなったが、戦場の犠牲者に比べて小規模であった。しかし、人口過密な都市の脆弱性は、想像力のある戦略理論家には、次の全面戦争でこれらが正当（まさに主要）な目標になることを暗示していた<sup>15</sup>。結果的には、たとえ第一次大戦がその時、激しさと無情さにおいて総力的とはなっていなかったとしても、それは敵の部隊と市民に対する陸と海さらには空からの未来の総攻撃という悪夢を予感させるかたちで終わっていた。

この限られた文章において示したかったことは、第一次大戦は安穩とした学術研究の対象にできるような、はるか昔のヨーロッパ戦争の話では決してないということである。反対に、「その起源、過程、そして結末は、20世紀を理解する上での核心である<sup>16</sup>。」

---

<sup>15</sup> 航空戦力の革命的潜在力に関する初期の論争については、B. H. Liddell Hart, *Paris or the Future of War* (London, 1925)を参照。

<sup>16</sup> Kennedy, *op. cit.*